

厚労省、柔軟剤注意点を保健所に周知

深谷桂子（日消連・洗剤部会）

3月号の本欄で触れた、香害をなくす連絡会（日消連・事務局）と厚生労働省との再面談が3月17日に実現しました。総理の国会答弁の影響もあるのか、厚労省からの「健康を守るということで対応させていただきたい」という言葉どおり、従来とは違う好感触の面談でした。

再面談に際しては、「厚労省シックハウス相談マニュアル内の『柔軟剤がシックハウス症状を招きうる』という科学的知見を情報発信してほしい」と要望。厚労省からは、「自治体の保健所を対象に、5省庁ポスターと共に、この記載を紹介して周知する」と回答があり、事務連絡文書を18日付で発出した旨、後日、知らせが入りました。すんなり要望が通るとはうれしい驚きで、活動の手応えを感じています。

面談では、マイクロカプセルの健康影響やカプセル素材の話をはじめ、家庭用品から揮発する化学物質が室内空気を汚染する問題を新たなシックハウス問題の視点で扱えないかなどを話し

合いました。

厚労省は、「まず、できることからやらせてほしい」とのことでしたが、データの収集・確認、事実関係の確認、測定の検討、国立医薬品食品衛生研究所の分析関係専門家への相談など、具体的な進め方について例示がありました。さらには、「連絡会が提供するデータを踏まえて、引き続き連携していきたい」という提案もありました。

面談の仲介をしていた大河南雅子議員は、「家庭用品からの化学物質・マイクロカプセルにより、人々が室内空気汚染にさらされている現実の解決に向けて、国として、事業者ではなく消費者の側に立ち、しっかりと研究調査体制を取り、責任を果たしてほしい」と締めくくりました。

なお、前回面談後、メールでのやり取りの限り、他省庁の対応は相変わらずに留まっています。引き続き5省庁（※）連絡会議の開催を要望するとともに、厚労省との連携を密にして活動していければと考えています。☺

※消費者庁、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、環境省

リニアがあってもなくてもここに居る

壬生眞由美（長野県下伊那郡豊丘村議会議員）

昨年6月、リニア工事が進む豊丘村の上佐原地区でトンネル掘削安全祈願祭が行われました。続いて翌月、上流の坂島坑口の掘削が始まりました。

工事の開始が約2年半遅れたのは、谷埋め残土置き場造成計画の安全性の確認で用地取得の同意に時間を要したからです。「2カ所の斜坑トンネルから搬出する残土は奥山の谷に埋めればいい」「いや、かつての三六災害（※）の二の舞となる負の遺産はあり得ない」。議会は二分しましたが、私は一般質問で、村が住民不安に真摯に寄り添うよう再三求めてきました。

昨秋から岐阜・長野・愛知でトンネル工事での死傷事故が続いています。10月、岐阜県中津川市瀬戸トンネルの崩落事故で2人死亡。11月、豊丘村の坂島工区の崩落事故で作業員1人が負傷。今年3月、愛知県春日井市トンネルで負傷事故。3月にもまた坂島工区で工事再開日に労災事故。

事故のたびに県や国の要請で休止、再開、また事故です。運営するJR東

海は事故の公表に消極的です。開業に向けて工期優先ですが、坂島工区でも今後早くても斜坑に1年、本坑に4年、掘削終了だけで2027年になります。

豊丘村では、事故報告を受けた翌日の本会議でも、村長から何も報告はありませんでした。「大したことではない。トンネル工事に事故は付き物」と考えているのでしょうか。新技術のリニアを待ち望む人たちが、工事の安全を第一に考えるべきです。半年前の安全祈願祭で、何を祈ったのでしょうか。

「リニアこそ、この村が活気づく千載一遇の光」と期待を寄せる村の空気が、それでも、立ち退きや、地主に知らせず進める大深度地下工事、工事完了後の水涸れ問題など、誰かの犠牲の上になり立つ幸せなんて望むべきではありません。工事が事故でとん挫するのではなく、世論で中止になることを願います。リニアがあってもなくても、この地で四季の移ろいと共に穏やかな気持ちで人々と生きていきたい。☺

※1961年、台風接近により伊那谷で川の氾濫、土石流、地すべりが発生し、死者・行方不明者136人の被害が出た災害。